関ヶ原軍記 三編 七 八

特へ遠3
2207
44

門へ遠 13
号 2207
巻 44

牛込 本 池清

関ヶ原軍記二編巻之廿七

目録

一 小西行長桐川村へ忍ぶ事
并林蔵主小西治生捕事
一 安国寺生捕事
并長曾我部関東へ降参の事

飜譯書
倭軍書
唐軍書
隨筆物
國々名所
近世戦争書類
繪本
書本
滑稽物
右之外數品所蔵写本覧之輕奉新出版
東京牛込細工町
書物偵大奉所
誠堂 池田蕉園

曲亭馬琴之作
其外諸先生作
軍書
敵討
諸家騒動
御捌物

牛込 池清

宗像神社文庫

関ヶ原軍記二篇巻之廿七

小西行長相川村より思ひ事
并林兵庫助 小西津橋ゟ城生捕
事

曰く小西摂津守長ゟ元来
武勇大力の人那須宗
もて捨殺と嘆く是國

おかむらに志のぶ因村辨宗
の住僧武小弼と生捕山賀吳
地獄なる又安西ちも同前
蒙人とるつくり海中にし
生捕くら長偏へり佛ぞつの
むくひ来るところ有り其外
長東氏家号刑部又ち通電吳
元利輝元ち忠大將として

之の飛脚を発きのところ吉
川後河内長兄忠保く秀元と
中合せ兄くに宍戸東に内通被
おくしも忠輝元法辨陽所
して和順也
云書に曰く宮ち元を告
むる彭ち如くこと形ぐ
侮ふべくして心気しまそて

那らへそうらへば何ぞの
隙元より及ぶとも信義正道
をさゝ行那るべうらへばまた
何程の富者ともいのち
あけれべそうらへ共福
和合い生も元を始とい
徳あり実まことのごとくこと
性十分のすぐ蔬の徳者も

命有てこそ楽をうれとい
へ一生の間衣食住の三つは
有り貧窮れば三つの
つまづく苦むを天地
の物なり下地より福ぶん
なる人を格べかりそうへ
ども性福者ありそうへ
共幸なるも必ず命を高

[illegible]ける迎くしたる[illegible]
云ふ貧者の乗中に人の
[illegible]も濡[illegible]る
金銀を拾ふ外りまく
盜人千[illegible]教さるゝ[illegible]
金銀[illegible]こゝて命を[illegible]
[illegible]れ拾ぶる程ゝ安きい
[illegible]の[illegible]金拾ふて

人の物をむさぼるゝ時
[illegible]大なる利あり古歌に
千匹切り歳ゞ命と
[illegible]も身に余り
[illegible]ある皮のある也
[illegible]り那のごとく虎い
[illegible]を生る猛獣[illegible]て尓
[illegible]人[illegible]食[illegible]右の通り岩

しき物ゝ雖も用ひ皮を
取扱ひ室内の敷ざるを
なり人も金銀抜く或
ひは衣服のうたを剪
るゆく盜賊の忍ひあり美
南の足袋方が裏る
衣ふ川むし林蔵
張氣張うる者もて小刀紙

生捕うり元を出家を人城
助くる役なるに責て助命い
せんとも百捕らせく襲撃を
うるうるの理をるるじを
事なり拾ひ林蔵を
小西玖珠へ送り襲撃を
殺りしが百もるく盜賊
手右の襲撃を奪ひ去らも

くさのくに数さまざまの物
を古墳のごとく金銀玉の
ごとくにそなへて其を引出
さまを初めの製なるべき
あるべきなるべし
去程に小弼持清の長い未ぶ
その前方初ばく
東照宮武れ作せ千小弼を那藤

宮のうりの家つを接所を
婚ふこゆ作せもしふ果
して生捕らるをくり別筆
合せるが如くこ此り長を
調略人といくれをつく者知
もいりて又武雲もいり元来
小弼清八をて唐物黄雲の時
より志し廣大まして古太閤

のこりの手うちのひのちふ能塚
の国八代るくびて宇古の高塚
をもつて武拾貫石の領一
解退討のこぶりの先手と
く加度能塚を清正おそ攻
ぶる手ふ西搦ふ搦るい石田三成
宮入魂して清正とふ和ふり
秀頼の為く逆こふ力せてと

いひぐ〜敵を明出陣をる
の時家人芋塚九右衛門大ひふ
強こして宮乗へふ力しのと
いひれ者ふ乗りて長塚
宇古手芋塚を搦り搦ひ
この九右衛門この度借をる
搦てい未強の事いふ弓数り
芋塚を宇古代棟代として武

雪たくまくその名を愛して
新高小弼明長に関ケ原に戦よ
討負け敗軍して吳服のうく
赤川村といふ所に忍びて
小弼を元来弁舌健にして尓
も利義なりしかば赤川むらにて
強くて民家に入るゆゑ花も
見きんるゆゑ強馬鞍おとをど

ふよ〳〵くそのうく金弼おとも
きりて病者なりとて尓抱弟
うけ皆的世人に喫合せ居り
彼百姓を思陳して小西とも
知らば又歌ぐうの為人とも
うう身ぐうの祖たぐく
洲藻く心易く痛いう動う
たうるに南村のうち曹洞宗の

稲林手林藤左衛門と云て豪勇なる
大力の侍あり て打ち彼家よ
来りしが捕手を見て林
此者へ駆い寄る敵の張本
なる小西甲斐守人なり
張一郎と云人の器量なる
ものなるゆえ捕て家来生捕り
中へ引ずり来びく

其者共中解く此辺の人
捕の役人行中丹後守 伊藤
治左衛門 堀内市左衛門 三人
の方へ林藤左衛門中へ入
明日軍出陣見物の為生
捕おき御中へ引ずり来して
夫より小西が方へ来りの旗本
吟味仕候ものべしとひて

酒盛りとさぶめ隠し酒を強て
小弱も振石の大なるを投げ出
の縁骨れて沉酔して前後
も知らざる時林蔵を
小弱が方と共に集ひ
来たりて盃を取り
弱者ども打合ひ騒ぎ
時二位振人立寄りて生捕んと

武雷直道のものの
るれば長刀抜く太刀抜
弱なるふ立りられはとや
ちいひ打ぐ近寄る百姓方抜
二人大槍へ投出さるの時林蔵
主の仇利多る法師るれを小弱
が道抜来く打返さ
ものり去も酒を沉酔して

打倒るゝとゝろを林藤左衛門
く押へられぬ間に大勢地
来りて縄を掛りさて
それより右の方を添く行
中丹後守お渡さいそぎ
京都へ引切て出張
内府公はやゝ
して林藤左へ美食入指牧下

され百姓共へ御意に付褒美
を下さるを即時に立所に村
村へ立帰りしが彼費洞の稲林を
今迄動揺の望まるゝに幸福に
成りし者ゝの恐るゝ
洞村の庶民流の國の望ぞく
数十人あつまりて手負あり
迎へ林藤左を囚人として二百

夜代金子をとらせ百りょうの
ゆりげよ唯一太刀より刺殺し
て行方知れずに成りしが家
ふ仕合ざる故いのちを失らる
らいこの林義を事之助て
小西将津ものいふ要平九郎と
新十郎これも久しく武蔵人へ
夜殺見者なとて命ふそで

二ツ腰りりうり切ものも
新きび礼義をを言ーまるゆく
此月ゝ知りいてても
内府公のは念頃を継くとゆ上
し撰此度遂続と一時せ変
は鎖心ぞりうりうもいかば和
夜清正と不和なるにちく
かくのごくるゆりとけりゆよ

中ゝ系流ゝ小弼ありと
法人是地蓋ゝり天晴弥高ゝ
り出ゞ男代ゝ世ゝ法人是を
いひなゝり

安ゝ生輔らるゝ
兼出ゞ家郷警祝冥来に
隆家の子

家ゝ安ゝるゝ来安藝の國
泥田郡金山の城主武田刑部
少輔信重ゞ子ゝ童名と行義
丸といひゞ出家して出羽守
と云ゝり学才智無して京都
東福寺の住僧ゝ成り紫衣の
身ゝ二十万ゝと所ゝ古家代
為ゝく妻帯肉食ゝ業耀明

手ゟ切り石田方へ加担し
張本人と成り刑ちらのこと
弟忠ゟとして中世野に世話
仕候り手勢三千余人南禅寺
ゟ出張して宮ケ原表の時
徳永が軍を攻るせんさるや
うなる武者共なれ共未だ家
ゟ手仕ら寄の者共人数

中ゟ出方八ッ人手数孔を以前
安堵なる通り迎先利家に完戸
徳勢当ゟ方へ入く通る
毛利ゟ人数不審して防げる
中ゟ出別所ゟ次ゟ退して谷ふ
前へしゟ武士ありて撃ちゟ
小原鞍馬寺へ引性院手
負を知り武士手い長坂

長七年井藤九郎唯二人ゐり
ぬるふ鍛るふ[illegible]房人を拾て
車頭り之此時去板年井の
女人中ゐるい今いちやのごれ
ざるとゐるゐるの生害ゐるべし
ゐ動む安西寺いゐゐ狂し
てゐの仮ゐいおゐぐ秋悔ふ
く軍法有といふ年老女人い

いぐゐゐ見ぐ[illegible]ぐゐ[illegible]ちく主人
城縁門して七条堀之場り
涙く思ひ寄ひ年西家るれ
び夜ちと思して仏前ゐ[illegible]
ゐゐり思ゐる仏天命ゐて去年
仏ゐる仏ゐ未義ゐが居お家
く雲結ゐいふ法師見身く
房人房ねの奥年九郎り

告けるゆゑ郷の軍兵二百
余人七条の道場を押寄せ
たるに平井右馬の丞人を
切利たるものの妻子伜兄弟皆へ
ものせしに妻子伜兄皆へ
前てあく退人の者ども是を
見てあの事物を焼られ
て頼りに退散まるゆゑて

今は逃れ難しと女人の家来
を召て玉寺と姫の御ゆゑ
一刀手利賢者この太刀きらび
隠し中りて小麻呂右の家
来女人を切元して安堵を
生捕れたりしかも奥平し部
らを侍慶英として金三百女
殺りり侍英林義主とら大きゆ

ちびるものの俗名なり小村又
所名なりといふものの如くなるの
金子い人の命と費して農夫
なり我が兵古来他を離ぜん為
也行で身代為すべきなり
あるべきて古へ伺りこの
三百文の金子を村中（配当を
法人等と大ひに感じん事

さて安西なるもの又小神社なる
いりこのこびれ法要を尋問
なるに安國寺い遠忘して一言
の言へも形く唯いのちれ残る
地急ぎけり去れば服を脱ぎ笠
を問の麻地を
く免ちんと法被り実被り
六條河原に第せる安西

寺ゞ宮殿の恩賞を蒙り
仏経納めるべし　新たに又長弓
殺生関白殿の博士
して古法師の書獲
良猶ゝ以て治め始ゆる元来
して以罪の一ケ条の領掌
井伴主政と入魂なりしとて
実ケ条中ゞ軍令敬親

ゞして主政を新み
ゞ不意に法敬の中に加る
ゞりそいへ共親ひとゞりゞ
ぜいなるゞ　御免状蒙りして
ゞ古法をさしゝ人ゞ
条派人ゞ法りゞ京都生徒
御免蒙りゞゞと法弾して
去る秋敬慶親入道祐義を捜索

さる物ゞてこの祐豊卿のゝ
ゝ張りゝ張家結
ゝ時ゝ時ゝ
赦免年極りゝる事ゝ伝て
去る家郎の家人も浪人し
く法所事御国ゝ花も武勇ゝ
者ゝ多しゝゝるに慶長十九
年大坂秋の時ゝ秀頼の頼
みゝより大坂城へ入ゝ同好の

陸を拓き集め一方ゝ大名ゝ如
て亡びゝり

池清

実ケ原軍記三篇巻の廿七終

池清

池清

関ヶ原軍記二編巻之廿八

目録

一長束召捕の氏家逐電の事
并毛利輝元降参増田蔵弟の事
一御講代京大坂亡さん事を勧め
事の事
并 神君御名言御遺誡の事

池清

関ヶ原軍記二編巻之廿八

長束石衛門氏家逐電の事

黄毛利輝元降参増田長盛

蔵番の事

宇喜多秀家水口の城を長束大蔵

大輔に六万石順して入事幷

の関より石田治部少輔ゲ綱略之

猶くい張本人あり元来筭勘
の名人にして又数術にも通達
せりのゆえ古太閤より召出され
出頭して日本惣検検地奉行
其後ちく御勘定方にかゝ今に太閤縄
として用ゆるい出来が縄ありと其
節より又寺社方へ加へく結構
結構用ゆるい石田に入魂して

意ちく逆徒の張本中く
仰命ありべきにあらざる
ようにび実ケ原合戦前の後
長崎水口に備へり元来筭数
の人なる故に勘定奉行
武其後山のく筭勘の用を
慶長年間より海部
内膳公に下知あつて伴勘筭

下るゝ事は退討として池田
輝政おゝび小倉侍中ちと
さゝ向けのゝ事ちく水口の城
攻んとすれば城堅固なれば
為也侍中ちい知謀ある人を
ゝ和談をべきよりも是一人
城中へ入くし長束ゝりし
ちい今い人四ゞ上郷てぐく

滅ぜ南城堅固ゝ搦籠るとも
実来は大軍押寄ゝび終りい
為城をべき形り所詮
内府公は隆家有てゝ為べき
ゝれゞゝ事あるひ
沛滝中上べゝとゝ
ゝゝる時ゝ天命はゝる
長束侍中ちと人質ゝ為べ

又敵も角もさべき様もあるべきなれば池田が陣を破られて心もとなかりさるべきのうへ
陣をべく形入中なりとて
橋を焼落して池田の
陣を除き出り此時池と
和泉へ因人として坂津
ふ形くさとは別るるとて去

此方より細川晴元結
のちなんとして石田と同じく
獄門せざりけるも又特別
幸名の様を氏家内匠正同じく
常陸介父子を長博を楠義
しとて実ケ原の一戦味方
敗軍のもきて子逃大坂
様に入く秀形の近臣と

萩野道喜と改名せしが大坂城
陣の後生害あるべきなれども
丈なり　徳川内府公へ
二条の御城へ入りしが
弾琴有て浴井安宗と組ひ
万民美業と唱る国人
おい奥平九八郎扇にて受けも
いまだ危角の出れまるなり

なり爰ふ大敵来りしなり
毛利輝元なり数人不意の由
敵手におあるべし石田が倒暮して
るのちび此勢大勢
敵を中くるべきにあらずと
いへ共梅子宰相秀元同陣する
叔父吉川弾河守上文写象
も危角実に敵対へき

年ごろ内ゝとなりて内通
城中に戦ひを交せどして
引ものぐ〳〵今この時手ぶり
く法方破きて悪級ゆゝ来る
後て輝元も降参べし
として大軍遠忘して帰り後
河内この時中い
内府公ち義理の堅実人にて

今此節遠帝てい陸兼知ゆゝ
参〳〵に往き玉〳〵遣兵次を以て
中ゝる頃秀い毛利家実来へ対
して恨ゝ言〳〵只ゝ内ゝ調略の
為ゝ不意ま陸敵ゝ知りしる
ゆり去野ゝこの度実ケゝゝ
出陣の軍会降伏して動ゝざる
ゝ御拠とい〳〵ども今更ゝ同心も

弓数之唯今は大坂堪と云り
左は弓は人数を差向け張り弼
先手にて一矢仕り切腹仕るべく事
もては同じくは前方の門通り
中にて敵を切りもらく
御免被蒙り左様仕り度旨と言
しられば
内府公曰一百先利を元来義
正数弓矢元和もぶべき度
古堪あらば對面のと
御免なるべきなるのうなり始
七月吉川強河守輝元の前へ
ゐみ出るく中なるい常侍の御
もてい毛利家を立退し事
げ中仕手仕るべくとて輝元い法
辞法衣の姿となるく九月二十

八日也　婿あり　嫡子秀元
吉川弾正　後河内　借仕
内府公御　對面の　義輝元を　所望
安藝　備後　国防　長門
御　義　備後　国防
法師　中納言　御礼申
の時　内府公を　御接
大内　家法　心和ぶ

て　仕せられ　扶も　痛つき
弾正　我儀の　心ちくしして
頂戴　我　又元就の　骨を
折く　切元　国々を　毒下
上　家康の　俗　暑さ
に　あ　元　れば　国防　長門
金　頂　知　城　安藝
備後の　毒　毒を　天下　人口も

あり奈
豊功と言べき
ものは此内又百石
之ものの
陪臣にて和泉
守にて国防
輝元と大坂の
ゟ取又信田左衛
門と八千余

人にて大坂を有しが
内府公へ和順をとり
家康公伊入ゟ先を大坂
城立て居城和州郡山へ
城を移し
もるく信田父子居城に
九月廿八日已刻
内府公の出陣
後ひとりて居る

府中に見より出て高野山へ
参らんとしけるに時く
去程大雨降て難儀仕る
居城郡山へも罷出たる紀之
助と云りけるに大坂へ急ぎ
角も加へべきまで御意之由仰
ら蒙て及ばず是天命なり
とて高野山へのぼりければ十章

十年雜敬一ヶ
叔此時長盛は尾州岩村へ流罪
元和年中大坂落城刑罪
ちらつる郡山の城を元の池田
輝政 慶長五年虎嵜七千余
人を引給ひこの時城海の
改修海辺動き傳大まで秀で
法人これを参る形く播四ヶ

城を立ち今は大坂の城より
ふかりこれ九月廿八日より
彼方へ此度大坂より片桐市正
和順の仕ひとして来れ之侍
天晴見事御人これ城
感じ入り

御備代荒大坂城亡さんる城

訪ひ来る事
再　神君御幸遠出名古屋の事

回く青野が原の大戦御勝利後
逆徒こと〳〵く平均仕足の城
入御付て十月十八日
片桐東市正秀頼の仕前を
して仕足を来り大坂へ

入御を新しき事なり御和睦成て
の〳〵大坂城の後巻
入御なり
世間天下は武国をおさめ秀頼
の近侍は内通使一味せしもの
たゝい悪く退散ひい死く
の代官地おい預〳〵没収あつて
秀頼の蔵入り駿河泉は三ケ国
城預り秀頼十八歳に成り玉ひぐ

条内方〳〵おい預るべしとの
事なり
元書に曰く高名は武天下
無双なる馬い乗を
のりて百騎を従ひ人を遣
さわりん高名時い御ら
ぜ近衛殿ひとりぐ形
はぐるまのうちつゝぐ

如くにしてこれを紀元の費一ツ
鄙今ハ蒙古を一羽に
翔つといへども元ハ蒙古
覆せざるの和船を考へ
く小天の山嶽千久しく
聳て能く足定め羽をの
て子星を海る或ひは馬を
百里を一きんに飛ぶの
町小路を奔る時ハ輝き
こしを定め向ふ陸りに
奔きを足定めて板一さんこ
けるを鈍ぶ形の如し
況んや人情を推ふ知や
兵遣くあのりんたり
ふ亀の子ちきやう千
きべきるゆ費一時り遠

とはいふ事なれば考へ合せ
べきなり又軍に敗北と
もいふべく法かい地形対
地考べく今日とる時きとる
ゝ勝利鎧びるゝこと
忠一云九忠一切とはいふ時き
一云いふもこゝ忠忠
くいふ時いく人千恩言雑云

云べゝゝゝゝゝ又いひそんじも
あるべきさこ九忠一切すな
時い何迚辛忍の切恢を
ゝゝゝゝゝ軍法よその
威義勇ゝゝ遣忠ゝ時
ゝ吟川義元ゝ討死又徹田
信長代実勇ゝ忠これ前車
のゝきいまめるり

来迎寺に陣を定て合戦
の故なく御勝利のうへ
即時に御上洛あつて行
さて文明の事なりしと
なん三井寺に於て廿日
御逗留夫より京都二條の
御城に
入御逆徒の余
類くまなく平均行身て

手負城徒の城に
入御大坂をば御さんぬされ
御工夫ありて神妙の
御感賞古今珍しき
御感賞なり

叛逆
徒川内府公に対奉
の軍御勝利のうへ石田 小西
安国寺 宇喜多 増長曽我部 浮田

条 去来ハ生害成家ハ遁電する
と雖も大軍ハ毛利家ハ夢ある
ごとく紀州と結人ありしとて
毒ごの御法弾して降参也
場内ハ熟ち居ハ今ハいまや大坂
の城斗りなり此度ハ
徳川家ハ御清代元
内府公へ申上る拾ハ度此度ハ

ゆへ大坂城攻討の儀
今ハ早行の造作もなく一戦ハ
御勝利なんと銀ごの尾ら
むと思ふ秀頼ハ御尚家
猜心の病ひなり今討ぶる時ハ
必ず坂の憂ひ如何べしと
強ひて御諫ハ中ハ
家康公の思ひ

猶ほ佐工夫搭がすてめんく
北及びとゝろうよあゝば妻神を
味ーにく海ばだ中而も利有
ちゝりきいく考攻搭さんいゝ
ざる夏之今赤彩を追討せる
時を結大名古太閤の恩代家
むりぶるめん加藤福島
池田 浅野 黒田 細川 蜂須賀

田中 長堂 鴻津 中村 等
和寅来の者ども而も南付
家康が武徳を慕つとゝいくども
ゝゝゝ同んせん夏之見果
あり 尚又夏今天下北海大名
半をつくして寇意乃西ゝい
ゝ 家康ゝ為ゝ慕
ばもいゝ秀頼

岩くまもりの城ども石田三成が
方方に固を立世の時の後好
さてい権威をつのり造作こ
ゝろひ石田が余勢を憎むのん
より起りて　家康が味
方と成りたる秀頼
を世に立て秀頼
石田城籠居して　より以後秀頼

城命して立て立る時い法人
悲く　家康城順術を
打のひ三成を逆臣よ
成りて天下平均の乱ゝる
度ゝ叛ゝる　平い古太閤の
臣ゝ平いあ　ゝ家伝長
横元の後秀吉横を極る也
平伝雄平形ゝ長久手

の戦ひ始りて秀吉の母堂を人質として遣
別て下向其後上洛して和睦
をとりのぶるゆい唯家人どもの
戦死と一命の理あり我等人
我慢の功を積い是法人の志る
ところすくなく秀吉様
ほまれあらばとりつへき太閤滅後よ

陣ゐんで　平こと下代後見様
彩こと秀頼様委ゐる
中ゆゑ三年代間千攻ゑず
時分
家康天下ふこの
結様なるつきれば
平四ゆゑ秀頼様の沙汰をもつて
きる時きて下いかに太閤東へ
徳ゆるつきて万代長久ちる

尾紀より助勢秀頼公へ
逆徒城廻りの時
より追討
蒙庵信
や時節
いよ〳〵逆徒の悪徒
家康が所
如の如くなり

けく〳〵と見る大坂の三
里ハ城七里の廓
和泉を負ひ南海
面海の用害
三面を流れ
城あり
さ十四丈之太閤造
虎口矢倉多つ

南の方に陸地
石垣三十丈の深
作

博多ごとく攻撃ひいらの城大軍城
ものく攻るとも高麗結城
を上太閤ゟ孫のことを思ひ
武異を報とも日本北半を
て高麗も又金銀を日本西中
北三分一城数年迄大きく
自由を切ものり又秀頼の方獲
る汗相市正を智謀武雪も

佐りとる大名之築い城ケ
七年結の間ゟて武雪い加藤
福島ゟ御市古屋の者
ゟて又貞心ゟり市正和順
て左大坂の内を鉄博のごと
お強ひく古太閤同好の長七
組を郎ゟるお城をすめと
して武雪の者者来ず高麗せり

徳川代の家康公
を一門の御名こうる〻 古容
思顧の者共なり 猥りに戦ふ
ぶ〻ぶ〻その出遠恵のぶんを
ふれ〻〻けふ〻
感ぜん感ぜん 幸りうも

池清

冥ケ原軍記三篇老の世八隅

池清

大岡政談 天一坊一代記 前后 四十 大尾

大岡政談 村井實録 前后 五十 大尾

大岡政談 遠見録 二十

開明小説 前田先生編 高橋阿傳實録 五十

遠世新説 上野戰爭實録 廿五

両國復讐 女武勇傳 四十

三考誠忠 義士夜討實録 廿六

誠忠 前田先生編 義士銘々傳 百二十 大尾

誠忠 柳亭種彦編 義士銘々畫傳 編

涼崎廷房編 繪水難波戰記 全十五

通俗戰書小説 繪入讀本
人情本寫本實録其外書籍
新古共取扱 真贋販賣仕候

一 古本類何品よりも不用まで拂ひ申候 直段
直段請申請 山百姓有之 物調ニ付不及申候
貸本ハ義ハ後書 喰失 失ひ代金申請ハ百部
仕候 尤又貸ハ儀堅く出断 十ヶ萬一又貸等
被申候見聞申受 此書 御中上置 ニ以

誠光堂 敬白

東京牛込區細工町十六番地
誠光堂 池田屋清吉